



学年団を訪ねて

教職3年目の若き学年主任を中心に、 学校が一体となって生徒の進路実現を支援

おおま
青森県立大間高校 2学年団



学年団が直面した課題

- ◎生徒への思いが空回りし、情熱にあふれる若い学年主任と、生徒との関係に溝ができた。
- ◎多様な生徒が入学する中で、高い目標を掲げる生徒の期待にも応えるために、きめ細かな指導が求められた。

学校概要

青森県立田名部高校大間分校を前身とする。校訓は、「敬愛」「自啓」「健康」。「自己肯定力・実行する力・考え抜く力・協働する力・郷土を愛する力」を「大間GP（グラデュエーション・ポリシー）」として掲げ、教職員が一体となった教育活動を推進する。2018年度からは、青森県の高等学校教育改革推進計画により、「地域校（学校規模の標準〈1学年あたり4学級以上〉を満たさない高校のうち、募集停止等により高校への通学が困難な地域が新たに生じる高校）」に指定。地域に根差し、地域に愛される学校づくりにまい進している。



設立 1974（昭和49）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約40人

2021年度進路実績（現役のみ） 4年制大は、青森公立大、青森大、青森中央学院大、八戸学院大、八戸工業大、盛岡大、湘南工大に7人が合格。短大・専門学校進学11人。就職16人。

生徒への思いが空回り…… 同僚が教えてくれた生徒の生の声

青森県立大間^{おおま}高校は、「マグロの一本釣り」で知られる下北郡大間町にある、本州最北端の高校だ。入学者数は40人程度、各学年2クラスの小規模校で、在籍する生徒の希望進路、学力は多様だ。だが、2020年度入学生は、国公立大学志望で、学習意欲の高い生徒が多かったと、当時、教職2年目で1年生2クラスの中の1クラスの担任を任された齋藤和哉先生は振り返る。

「入学後すぐに、1人の生徒が、家庭で自主学習をしたノートの点検をしてほしいと申し出てきました。そして、その生徒の取り組みを見た何人かの生徒が、自分もノート点検をしてほしいと手を挙げました。生徒の学習意欲に応えてあげたい、学力を着実に高めて、それぞれの希望進路の実現を支援したいと強く思いました」

「高い志を持ち、努力を積み重ねていけば、必ず君たちの夢はかなう！」。齋藤先生はクラスの生徒を鼓舞し、最初のうちは生徒の小さな努力も手放しで褒めた。しかし、もっと頑張ってもらいたいという思いが高じ、いつしか生徒に接する齋藤先生から、それまでであった温かみが薄れ、代わりに、厳しさが感じられ

るようになった。夏季休業明け、各教科から与えられた課題を消化できずに苦しんだ生徒には、寄り添うような言葉をかけず、何とかこなしてきた生徒にも、「それくらいは取り組んであたり前」といった態度で接した。

当時3学年団の担任の1人で、現在2学年副主任を務める今成^{こんまのり}哲先生は、生徒から「齋藤先生は自分たちのことを分かるうとしてくれていない」といった愚痴を聞いた時、「自分が生徒の言葉を伝えなければ、齋藤先生が成長するチャンスを失ってしまう」と思った。

「齋藤先生が頑張っていることは、全教師が知っていました。だから、生徒からそんな愚痴を言われていると知ったら、悲しい気持ちになるだろうなと思いました。でも、齋藤先生なら、その経験を糧にして、生徒との関係をよりよく再構築することができると思います」

今先生は、週末にじっくりと自分を見つめ直してほしいと考え、金曜日の下校前に、齋藤先生に生徒の言葉を伝え、齋藤先生の思いに耳を傾けた。齋藤先生は、夏季休業が終わった時点で、自分に課題を見てほしいと頼んでくる生徒がいなくなるなど、自分に対する生徒の態度が4月とは違っていることを自覚していたこと、そして、その現実から目を背けていたことを、今先生に率直に打ち明けた。



リーダーに聞く！ 5つのQ&A

Q どのようなチームを目指しましたか？

A 生徒とはもちろん、先生同士でも分け隔てなく語り合い、アクティブに行動する学年団です。

Q リーダーとして心がけていることは？

A どんなに疲れている時も、「いつもの自分」でいることです。いつもと様子が違えば、周りの先生方にも生徒にも気を使わせてしまいます。特に、ネガティブな感情はできるだけ態度に出さないように心がけています。

Q 学年団としての「成功」は？

A 生徒が、自分で選んだ進路に自信を持って一歩を踏み出してくれることだと思っています。高校3年間でそういう進路を見つけてほしいです。

Q リーダーとして自覚する長所は何ですか？

A 若さと活力です。そして、トライアルアンドエラーをいとわない気持ちです。

Q リーダーとして自覚する短所は何ですか？

A 面談で、生徒から大学や入試のことを聞かれた時に、自分の知識不足を実感することがあります。もっと勉強し、周囲の先生方からたくさん吸収したいと思っています。

「土日に頭を冷やし、月曜日の家を出る頃には、生徒の言う通りだ、自分は無理に厳しく振る舞っていたと思えるようになってしまった。そして、もっと素直な気持ちで生徒に向き合い、ちょっとした努力でも認めてあげること、生徒を前向きにしていこうと考えました」(齋藤先生)

夏季休業の課題を消化できず、学習に対して後ろ向きになりつつあった生徒の気持ちを再び盛り上げるため、齋藤先生は早速進路指導主任に相談し、1年生にかかわるすべての教師がメンター役となって生徒を受け持ち、日々の家庭学習の状況を確認してアドバイスしたり、進路選択の悩みに答えたりする学習メンター制度を立ち上げた。秋以降、1学年団は、生徒個々の学習状況や進路意識の深まりなどを毎週の会議で共有するようになった。

齋藤先生は、「自分たちのことを分かってほしい」と口にした生徒を自ら希望して担当した。メンターとして、折に触れてその生徒に言葉をかけたが、2学期、そして3学期も、その生徒が齋藤先生に話しかけてくることはなかった。それでも齋藤先生は、生徒の日々の学習の取り組みを、「頑張っているね!」と評価し続けた。そんな生徒が、「志望大学合格のための学習方法について相談したいです」と言ってきたのは、1年次が

終わる3月になってのことだった。

**若き学年主任を、
それぞれの強みを生かして支える**

21年度、齋藤先生は2学年主任を命じられた。大きな責任を感じながら、「自分の力を最大限に発揮して、生徒たちを伸ばして欲しい」と意気込む若き学年主任を、同じ学年団に所属することになった教師たちは、それぞれの立場で支えようと決意した。

今先生は、「齋藤先生1人が悪者になるような学年には絶対にしない」と心に決めた。



写真 3年生が進路選択の歩みを振り返る進路体験発表会には、近隣の中学生も参加。地域の子どもを育てる役割を同校は担っている。

＊輝く学年団を見守る＊



**教師がともに
成長する場でありたい**
校長 岡 一仁 おか・かずと

小規模校の本校は、学年主任は専任ではありません。齋藤先生はクラス担任でもあるため大変ですが、管理職を含む全教師が齋藤先生を支え、みんなで成長する喜びを味わっています。グラデュエーション・ポリシーに掲げた「自己肯定力・実行する力・考え抜く力・協働する力・郷土を愛する力」は、教師にも求められる資質・能力です。先生方がともにそれらの資質・能力を高める学校であり続けたいと思っています。



**気軽に語り合える
雰囲気大切にしたい**
教頭 岩崎洋児 いわさき・ようじ

齋藤先生を始め、本校の先生方は生徒のために常に一生懸命です。そして、本人は気づいていない、ほかの先生から見ると「こうした方がよいのに」と思われる改善点については、齋藤先生に対して今先生がそうしたように、気軽に指摘し合える関係性を構築できています。「誰かがしてくれるだろう」「あの人がしてくれるだろう」ではなく、「みんなでしよう」といったムードを、これからも醸成していきたいと思っています。



学年団を訪ねて



2学年副担任・教務部
高橋七海 たかはし・ななみ
教職初年度。同校に赴任して1年目。
国語科。



2学年副担任・進路指導部
佐藤幸夫 さとう・ゆきお
教職歴13年。同校に赴任して1年目。
数学科。



2学年副担任・担任・学年生徒指導
今成哲 こん・まさのり
教職歴5年。同校に赴任して4年目。
商業（ビジネス情報）科。



2学年主任・担任
齋藤和哉 さいとう・かずや
教職歴2年。同校に赴任して3年目。
理科（生物）。

「もしも、学年主任としての齋藤先生の言葉を理解できない生徒がいたら、『齋藤先生はこういう思いを持っているんだよ』と、その生徒に分かりやすく説明するのが担任の役割です。学年の生徒全員が齋藤先生の言葉を理解し、信じていることができるよう、サポートしていこうと思いました」

前任校などでの担任経験が豊富な佐藤幸夫先生は、齋藤先生が1か月先、3か月先を見通して行動できるようにアドバイスをしていこうと考えた。

「教師になつて3年目の時には、私もたくさん失敗をしました。その失敗を思い出して、齋藤先生に何事も早めに助言することで、若い学年主任に自信を持って動いてもらいたいと考えました」

同校の教師では最年少で、教職1年目の高橋七海先生は、生徒との年齢の近さを生かし、授業で気づいた生徒のつまずきや、何気ない会話で感じた生徒の心情の変化などを齋藤先生に共有している。

「齋藤先生の机の上には、担当の理科以外の教科の参考書が積まれています。生徒に質問されて答えられないと悔しいから勉強しているのだそうです。英語の小テストも生徒と一緒に受けて、競争しています。生徒が目標に近づくために、自分ができることなら何でもしようという情熱が伝わってきます」

2学年団は新しい試みにも挑戦し始めた。進学希望のクラスでは、生徒の志望と学力に合わせたよりきめ細かな指導を目指し、習熟度別授業を導入。また、夏季休業の前には、各教科が出す家庭学習の課題を一覧にして生徒に配布し、学習メンターの教師が学習計画をアドバイスすることにした。さらに、2年次の1月には、放課後、学校に残って勉強したいという生徒の声を受けて、学習室を設置した。平日19時まで使用可能な学習室には、

連日4、5人の生徒が足を運んでいる。

「最近では、就職希望の生徒も学習室で勉強するようになりました。希望進路は違っても、それぞれの目標に向かって努力しようとする雰囲気が出てきたと思います」（齋藤先生）

教職3年目の自分は知識も経験も不足しているからこそ、失敗を恐れず、熱意を持って、いつも挑戦していきたいと齋藤先生は語る。

「周囲の先生方から、たくさんサポートをしていただいていると、日々感じています。先生方の力を借りながら、生徒一人ひとりの希望進路を実現するための方策を、これからも追究していきます」

* 学年団 輝きのポイント *

- * 生徒への言葉がけや、学年団としての先を見通した行動などに関して、経験のある教師が学年主任をサポート
- * 学習メンター制度や習熟度別授業など、生徒の志望と学力に合わせた支援策を次々と実行

※プロフィールは、2022年3月時点のものです。